

## 「まねぶ」ことの大切さ

この夏、高松市美術館で、「森村泰昌モリエンナーレ／まねぶ美術史」なる、特に美術関係者の間で大きな話題となり、好評を博したユニークな展覧会が行われました。名画の登場人物や女優などに扮した独自のセルフポートレートで国内外において高く評価され、注目されている美術家・森村泰昌さんが、学生時代から描き残しておいたマティス、クレー、デュシャン、岡本太郎、横尾忠則、赤瀬川原平など、20世紀美術史を駆け抜けた巨匠たちを「まねぶ」ことであらゆる表現の可能性を探求しようとして描いた習作の数々を、高松市美術館に所蔵する本人らの作品と対峙する形で展示したものです。キーワードは「まねぶ」ということ。「まねぶ」とは、「まなぶ」と「まねる」の共通の語源でもある古語だそうです。つまりは、「まねる」と「まなぶ」ことは、元々は同じ意味を持つ言葉とも言えます。

書道でも、古典をひもとき、それを丁寧にまねて書く、臨書という手法で繰り返して練習することを抜きに上達はあり得ません。今から約1700年前の書聖王羲之や約1200年前の空海などの名人たちの書の臨書を繰り返すことにより、次第に自分なりの書の型が出来ていき、作品が輝きを放つようになるのです。

日本では、古くから学問や武芸の上達には、守破離という3つの段階を心得て、それぞれに精進修行すべしということが言われていました。それは、能や歌舞伎の世界でも、茶の湯の世界でも同じで、およそ武芸を習い、極めようとする者の共通の認識だったようです。その意味するところ、「守は下手、破は上手、離は名人」、あるいは、「守って型に着く・破って型へ出る・離れて型を生む」、とする解説もあります。難しい概念ですが、師や名人と言われる人の型をまねて、まなびながら、着実に守破離と進むべきことが説かれているように思います。守破離の極意は、まさに「まねぶ」ことにある、と言ってもあながち間違いではないでしょう。

森村さんも、「まねて、まなんで、今の私がここにいる（※）」と言い切られているように、「まねぶ」ことにより自分独自の型を見つけ出し、離（名人）へと発展されました。「まねぶ」という言葉とそれを実践することの大切さを再認識すべきです。

※「まねぶ美術史」（著：森村泰昌）